

貝毒調査（漁場環境監視等強化対策事業）

池脇義弘・加藤慎治・吉田和貴・平野 匠

特定有毒プランクトンに起因する二枚貝類の毒化実態を把握し、貝類の食品としての安全性を確保するとともに、漁業や県民等への被害の未然防止を図った。

方 法

播磨灘、ウチノ海、鳴門市中央部、松茂、徳島市、小松島市、阿南市、海部郡の8海域(図1)を設定し、貝毒原因プランクトンの出現状況とカキ等二枚貝の貝毒検査を実施した。貝毒原因プランクトン調査の方法及び結果については本事業報告書の、「有害プランクトン調査」（北灘）、「北灘養殖漁場環境調査」, 「ウチノ海養殖漁場環境調査」, 「橘・椿泊湾赤潮貝毒調査」, 「藻類養殖漁場栄養塩調査」を参照されたい。

麻痺性貝毒原因種として*Alexandrium tamarense* , *Alexandrium catenella* 及び*Alexandrium tamiyavanichii* を、下痢性貝毒原因種として*Dinophysis acuminata* 及び*Dinophysis fortii* の出現を調べた。なお、緊急モニタリ

ング（定期的な貝毒原因プランクトン調査と貝毒検査）を行うレベルは、それぞれの種で設定されている（*A.tamiyavanichii* 1cell/mL, *A.tamarense* 5cells/mL, *A.catenella* 50cells/mL, *D.fortii* 50cells/mL 以上）。

また、貝毒検査は財団法人食品環境検査協会に依頼し、その可食部における麻痺性貝毒の毒量を検査した。

結 果

平成30年3～4月と平成31年3月に、*A. tamarense*による麻痺性貝毒が大規模に発生した。平成30年の発生ではすべての海域で、平成31年の発生では播磨灘とウチノ海を除く海域で基準値（4MU/g）を超える麻痺性貝毒が検出された。それぞれの海域の貝毒原因プランクトンの密度と二枚貝（カキ類）から検出された麻痺性貝毒の毒量を図2、3に示した。また、播磨灘、紀伊水道の小型底曳き網漁場で漁獲されたアカガイや吉野川の感潮域のヤマトシジミからも4MU/gを超える麻痺性貝毒が検出された（図4）。

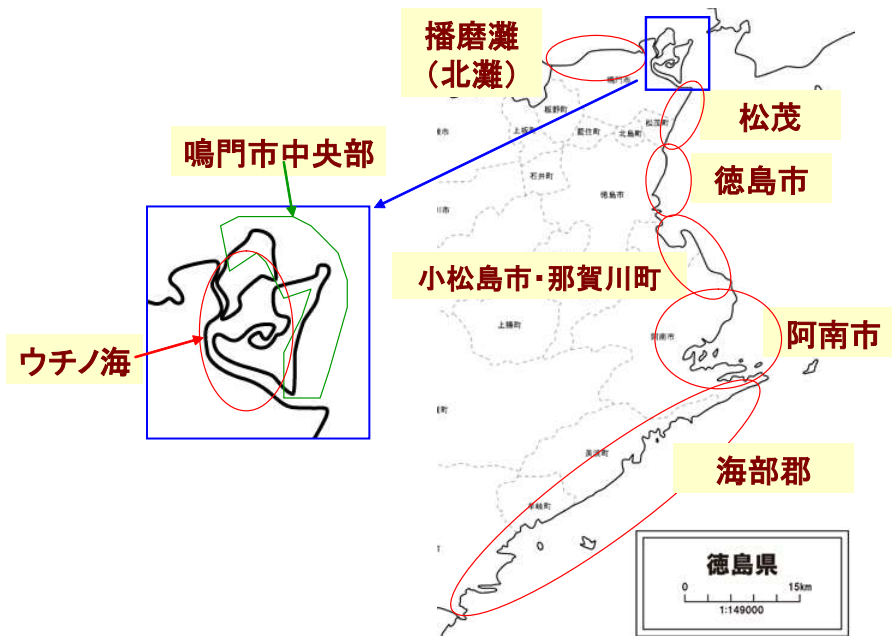


図1. 調査海域区分

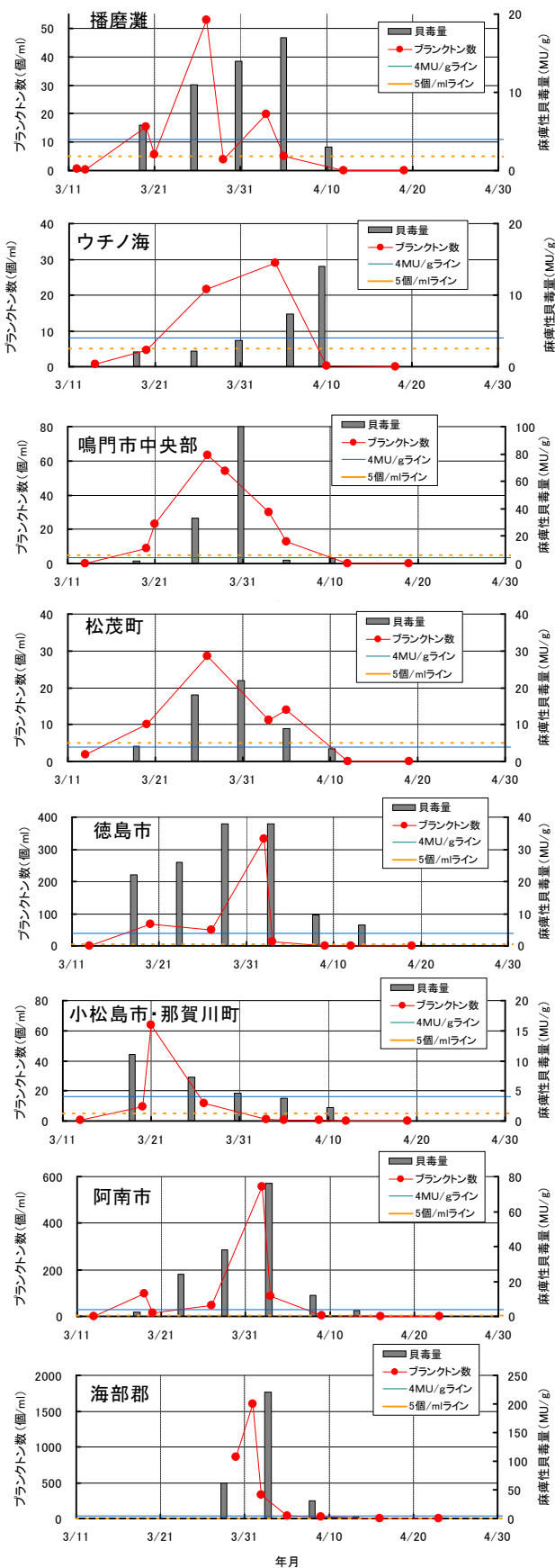


図2. 平成30年3月～4月の各海域の*A. tamarense*の出現数とカキから検出された麻痺性貝毒量

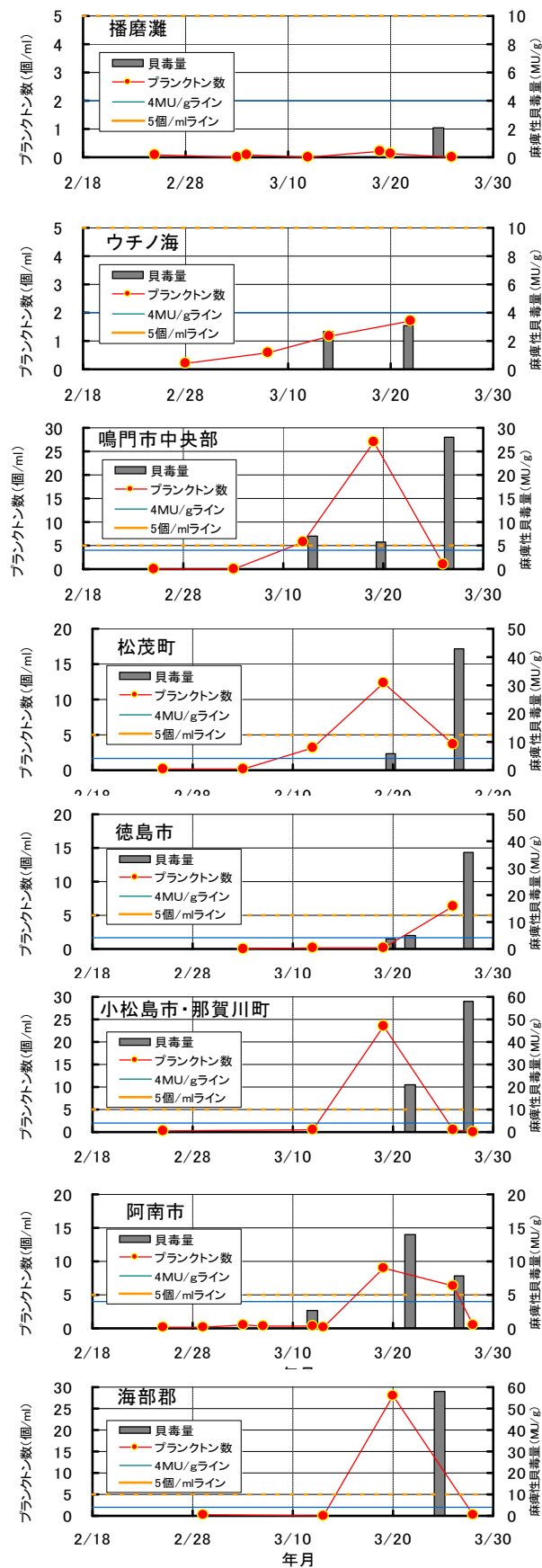


図3. 平成31年3月の各海域の*A. tamarense*の出現数とカキから検出された麻痺性貝毒量

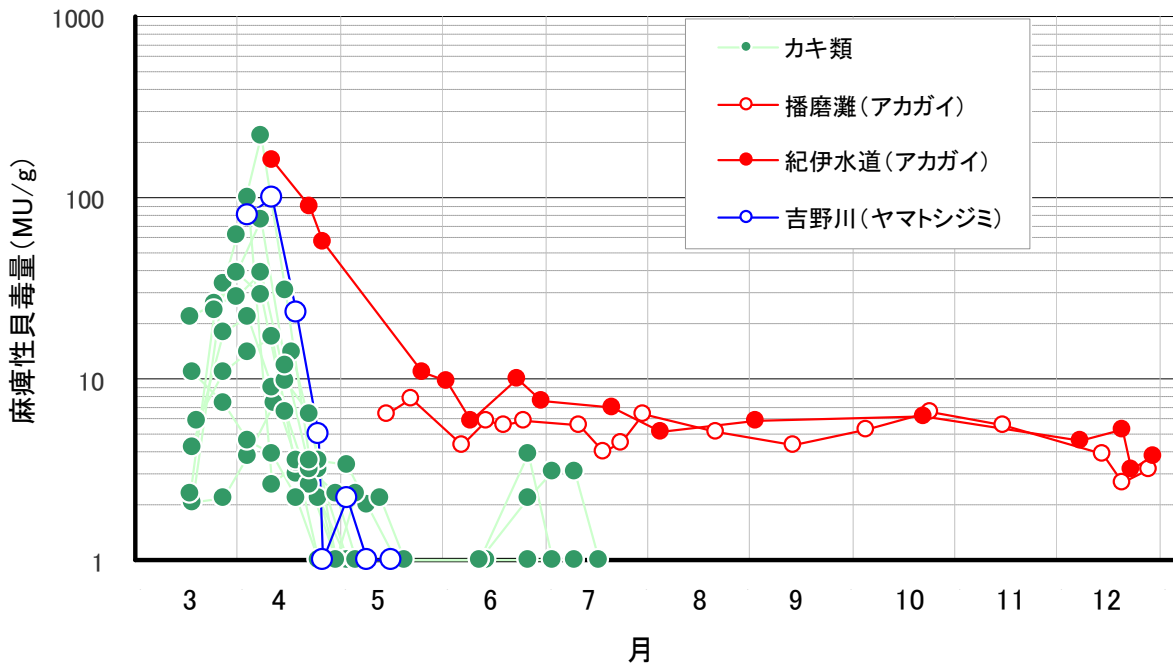


図4. 平成30年3月～平成30年12月の種別別麻痺性貝毒量